



長岡市立科学博物館主催の生物標本展示会で二年連続金賞の安藤隆夫くん(新飯田小六年)

十月九日、教育委員会、第二十二回白根地区児童生徒科学研究発表会が開かれ、科学作品の部で新飯田小学校六年安藤隆夫くんの「蝶の標本」誠くんの「トンボの標本」がそろって金賞を獲得しました。隆夫くんは長岡市立科学博物館主催の生物標本展示会にも出品し、ここでも金賞を獲得しました。長岡市へ出品したのは「弥彦山系の蝶」と題した標本で、ここでの金賞獲得は二年連続となりました。安田昭三校長は「蝶の話

になるといろいろな名前がポンポン出てきます。蝶の標本づくりは難しいのですが、仕上がりがきれいです。蝶を愛する心があるからキチンとできるんですね」と話します。昭和五十八年、親子で三条市の井栗公民館近くで、沖繩以南しか土着していない「カバマダラ蝶」を捕まえました。これは迷い蝶なのですが、県内で捕まっただのは初めてで、本州でも十二年前に千葉県で発見されて以来のことでした。こうした機会に巡り会えた



約三千の蝶を前に金賞を喜ぶお父さんと隆夫くん(中央、誠くん)

県防犯標語「中・高校生の部」で最優秀賞受賞の大橋香里さん(庄瀬中一年)



最優秀賞と聞いて「びっくりしたが、うれしかった」と話す大橋さん

十月十一日から始まった全国防犯運動の一つとして、県防犯協会が行った防犯標語の中・高校生の部で、庄瀬中学校一年生の大橋香里さんの作品「戸閉まりは、この目この手で、もう一度」が最優秀賞に選ばれました。この運動は、防犯思想の徹底を目的に毎年行っているもので、今回の受賞は、県下二千三百点の応募作品の中から金の同賞の盾は十月六日、学校の全員朝会の席上、長谷川白根

警察署長から本人に伝達されました。大橋さんは「中学生になったばかりの受賞でうれしいです。これは六月中旬に作りました。特に苦労したというところはありませんでした。この目この手で、もう一度」の目この手で、がなかなか浮かんでこなかった」と言います。授業中に先生に呼ばれ、新聞を見せてもらって受賞を初めて知り「びっくりしました」と話しながらも「よかったね」と家族からも祝福されてうれしかった」と当時の感激を新たにします。酒井教務主任は「標語づくりの技術的指導は特にしませんでした。今回の受賞は、三年前税務関係で一位になったのに続く喜びです」と話します。大橋さんは取材終了後、早速剣道部のトレーニングに加わりました。

南十字星の下で

県青年リーダー研修会に参加して(小林明さん)



●交友は心と心のふれあから(シドニーのボンダイビーチで、出会った少女と小林さん)

県主催の第18回県青年リーダー養成海外研修事業に、市長の推薦で小林明さん(新飯田館・農業・25歳)が市の代表として派遣され、オーストラリアで研修してきました。この事業は海外の青少年事情の視察、生活体験、外国青年との交歓などで、青年たちの国際視野を広めようと毎年開かれています。研修の様子を小林さんから報告していただきます。

初めての異国の地。高鳴る胸 県内各地域の青年活動団体などから選抜された二十五人の団員とともに新東京国際空港を飛び立ったのが、九月十三日の定刻二十時でした。機内でおよそ九時間も過すと、やがて眼下に今日まで夢に見たオーストラリア大陸の一角が現れました。朝日に照らされ、世界一の乾燥大陸と称される広大に続く赤茶けた砂漠がまず歓迎してくれ、窓からは、続いて真っ青な海と複雑に入り組んだ海岸線が見えました。世界三大美港に数えられるシドニー港です。シートベルト着用のサインが点滅し、いよいよ空の玄関シドニーのキングスフォードスミス空港に到着です。空気のうまさ、自然の雄大なな

ど、初めて踏みしめる異国の地に胸が高鳴りました。思えば、日本とは季節が正反対の南半球は、今春を迎えようとしていました。個人主義が浸透、失業者も多く 同一行は、世界的に有名なオペラハウスをはじめ多くの市内施設の視察、オーストラリア青少年活動団体との交歓、YACA(オーストラリア青年問題協議会)交歓会など、二日目からは盛りだくさんのメニューを消化しました。人種の色や地の境、わが立つ前に差別なしをモットーにしていた私も、国柄、人種の違いなどから感心すること、戸惑うことばかりで、白根という日本の地方に在るだけに、もつと国際感覚を身に着けなければと痛感しました。例えば、オーストラリアでは個

人主義が浸透し、十五歳までの義務教育が終われば、働きたい人は働き、もつと教育を受けた人は進学と、進む道は違っても、すべて自分の意志で選択していくという国民性を感じさせられました。しかし、失業者が国全体で二五%もいるという事実には驚いたのは言うまでもありません。思いやりに感謝。ホームステイ 次に、私の第二の研修テーマであるメルボルンでのホームステイ(民泊)を記しましょう。家族はデビットパパ、手料理のうまいナンシー、日本にホームステイをした経験を持つルー、そしてサッカーで足をけがしいつしよに遊べなかった弟のリチャードの四人です。英国からの移民たちが開拓した

オーストラリアでは、当然のことながら会話は英語です。白根井での会話を得意とする私にとって、英単語と英単語の組み合わせで日常生活ができたのだから不思議なものでした。考えてみると、彼らの思いやりに私たちが忘れかけているものがあるように思えてなりません。デビットに「アユー・フレンド・デクシヨナリー?」と言われ、迷わず「イエス」と答えたら家中笑いの渦となったのでR(ある)。この民泊で、人と人、言葉や人種、国が違っても、心消ければだれとでも心のふれあいはできると思いました。もちろん、自分も相手の立場を尊重し、お互いの立場を認識し合う基本から始まることは言うまでもありません。加えて県内各地域で今後も活動が続けていく団員との信頼関係が出来たことも記すまでもありません。



●日本から持参したハッピーを着て交歓(メルボルンの青年たちと)



●シドニー、キャンベラ、メルボルンなど各地でいろいろな所を視察(写真はシドニーのまち)

最高の研修。成果を生かしたい わずか十二日間の研修でしたが、人と人との信頼関係の樹立ができたことは、私の人生において最高の研修でした。国土は日本の二十倍。あの広大なオーストラリアで得たものを、この地に確実に根付かせるため最善の行動をしようと思ふ息吹が、今、私の胸に高鳴っています。(原文のまま)